秋の風が頬を撫でる。冷たい空気が、心の奥底まで澄み渡るように感じた。
バイクの振動が体を包み込み、彼を遠い記憶へと誘う。
このバイクはただの乗り物ではない。亡き親友、碧真実（まさみ）の形見。
彼がいなくなってから、このバイクは隆二にとって、唯一のものとなった。

秋の彼岸の頃になると、隆二は静かにその場所へ向かう。誰にも告げず、ただ風に乗って。
士官候補生だったあの頃、真実（まさみ）と共に過ごした日々が蘇る。風を切って走り、共に笑い、時に競い合った。胸の奥に秘めた感情。それは、言葉にするにはあまりにも淡く、切ない片思いのようだった。

＊＊＊

隆二と真実（まさみ）は、防衛大学校の同期であり、共に幾多の試練を乗り越えてきた仲間だ。真実（まさみ）は快活で頼りがいがあり、どんな厳しい訓練や任務にも笑顔で立ち向かう男だった。その姿勢に、隆二はいつも感化されていた。そして、少しずつ彼の中に芽生えたのは、ただの友情以上の感情だった。

訓練中、真実（まさみ）が笑顔で彼に話しかけるたびに、心が少しだけ苦しくなるのを感じた。しかし、隆二はその感情を押し殺し、ただの友情だと言い聞かせた。それでも、真実（まさみ）の隣にいると、どこか心が温かくなるのを感じずにはいられなかった。

ある訓練の夜、二人は小さな焚き火を囲み、バイクの話で盛り上がっていた。
真実（まさみ）は、ある日突然バイクを手に入れ、それからというもの、休みの日には必ずバイクで遠出するようになった。彼の影響で、隆二もバイクに興味を持ち始めていた。

「やっぱりバイクはいいな。風を感じて走ると、自由になった気がする」
真実は（まさみ）火の明かりを見つめながら語った。
「お前はいつも自由だな」
隆二が笑いながら返すと、真実（まさみ）はニヤリとし、

「お前もそうなれるさ」
と楽しげに肩を叩いた。
「俺もバイクを買うよ。そうしたら、一緒にキャンプに行かないか？」
「いいな。そうしよう」
笑いながら、そんな約束をした。二人とも普段から野山を駆け回っているおかげで、サバイバルには自信がある。なんなら、キャンプ用の肉は現地調達したっていいくらいだ。
「お前は凝り性だからな。ジビエに合う酒も選んで持ってきそうだな」
「何が合うのか、考えるのも楽しい」
「隆二らしいな」
真実（まさみ）の低い笑い声は、どこか影を帯び、隆二の喉を撫でるようだった。ドキドキする心臓を手で押さえながら、隆二も笑った。炎で頬が赤くなっているのだと、自分に言い聞かせながら。
「どうした、りゅーじ？」
こちらを覗き込む飴色の瞳。甘い優しさだけが二人の間にはあった。
その時の真実（まさみ）のくすぐったそうな顔が、隆二には甘酸っぱい思い出として残っている。真実（まさみ）へのこの特別な感情が、彼をより一層大切に思わせる一方で、その気持ちがどこか切ないものであることを自覚していた。

しかし、その真実（まさみ）が突然、事故でこの世を去った。
訓練中の不慮の事故だった。
真実（まさみ）の死は、隆二に深い悲しみをもたらした。彼は、自分がもっと何かできたのではないかと自責の念に駆られた。

真実（まさみ）の葬儀の日、遺族として出席していた幼い勇の姿が、今でも隆二の記憶に鮮明に残っている。勇は兄の死を理解できないまま、呆然とした表情で立っていた。その小さな背中に、隆二は言葉にならない責任を感じた。
そして、真実（まさみ）への甘酸っぱい片思いのような感情は、彼の胸の中で静かに終わりを告げた。

真実（まさみ）の形見として残されたバイクを、どうか乗ってほしいと真実（まさみ）の親から頼まれ、引き継いだ。隆二は、彼との思い出を胸に、毎年お彼岸になると真実（まさみ）の墓を、そのバイクで訪れるようになっていた。

＊＊＊

防衛大学を出て、陸上自衛隊に配属が決まり、碧勇三等陸尉は上官からバイクのメンテナンス係に命じられた。自分が海外派遣に出ている間、二ヶ月に一度エンジンを吹かせて来いと言われた。

上官は佐官のため、寮ではなくアパートに住んでいた。その駐輪場にホンダのバイクは停められている。駐輪代は月額二千円なんだと言っていた。

自衛隊では、あらゆる乗り物の免許が取れるようになっている。碧勇も大型バイクの免許を持っていた。ただエンジンを入れるだけじゃ、バイクの様子はわからないと、町内を一周する。スポーツタイ

プのそのバイクは陸自の偵察用バイクとはタイヤもシルエットも全然違う。スピードが出るように設計されている。

キーを回し、エンジンを入れると、バイク全体が振動する。
ハンドルを握りながら、ウィンカーをつける。駐輪場を出て左折。突き当りにぶち当たったら、そのまま左、左、左と折れていけばあっという間にぐるりと一周する。闇雲に右左折するより、安全だ。これはマップのないダンジョンを攻略するときのコツだった、亡き兄によれば。
勇の中にある兄の姿は、朧だ。どちらかといえば、留守を頼んできた上官を兄のように思っている。写真のなかの真実（まさみ）は、いつでも笑っている。兄との記憶もはるか彼方だ。けれど、頭を撫でては、一緒に遊ぶか？　バイクに乗るか？と、自分を後ろに乗せて、川原なんかに連れ出してくれたことは、よく覚えている。
多分、そのバイクなんだろうな、と思う。
丁寧に磨かれ、メンテナンスをされている佐竹２佐の赤いボディのホンダのバイクは。
快調なエンジン音を聞いていると、なんとも言えない気持ちが込み上げてくる。
懐かしさとも違う。
兄との繋がりが感じられるからかも、しれない。
そして、上官もこんな気持ちを胸に、バイクに乗っているのかもしれない。
快活な男だったと聞く。豪胆で物怖じしなかったと。
訓練中の事故は、爆発処理を間違えた仲間を庇ってのことだったと聞いている。兄の身体は吹っ飛んで、粉々だったとも。
過酷な現場に身を置く自分も、そんな死に方も覚悟のうちだ。死と隣り合わせの任務ならば、兄のように、人を守って死にたい。
そんな決意を上司に話せば、目を細めて、頷いた。
ああ、この人は同じ気持ちなのだ、とわかってしまった。

毎年、彼岸は家族と一緒に墓参りをする。
山奥にある寂れた寺の墓地の一角に、碧家代々の墓がある。朝行くと、すでに水滴を乗せた花が花入に飾られている。白い線香の灰はまだ熾火がくすぶっていて、煙をのぼらせている。母も驚いていたが、いつの間にか、それは通例のこととして碧家では受け止められていた。
上司が海外に出張している時期と被ると、墓には花も線香もなく、ああ、やっぱり、と思う。
律儀な人だ。
そしてやさしい人だ。
兄の親友は、墓前でなにを語らって、去っていくのだろう。
耳を澄ませると、山々を猛スピードで駆け抜けていくバイクのエンジンの唸りが聞こえてくる。微かに、そして遠くなっていくその音は、手向けの祈りに似ていた。